

世界の終わりに 伊武トーマ

世界の終わりに響くのは たった二羽の鳥の羽音 悉く焼き尽くされ 消えやらぬ雲に覆われ 凍りついた世界 明けない夜に 見えない星を追いかけ はばたく鳥よ 胸に手をあて 聴け

世界の終わりに はばたく たった二羽の鳥の羽音を

銀杏便り 神泉 薫

まぶしい黄金色の銀杏が はらはらと舞い落ちる 路上に描かれた 一枚一枚の 扇形のことば 丸く眠る子猫の傍らへ 寄り添う季節の便り 一度きりの 朝日を浴びて 生まれただけの子猫の目に 映りゆく空の青さ 小さな足裏へと響く 弛まない大地の鼓動 温もりと澄んだ祈りを携えて 日々は過ぎていく 不意に枝を離れて生きる ひとひらの銀杏も 気ままに転がりゆく乾いた空き缶も 風に逆らわず 行き先を知らぬまま 水面へ垂らした白いミルクは 永遠の螺旋を描いて カップの内側を経巡る 果てのない循環 という名の優しさの 世界を覆う一枚の 大きな毛布にくるまれて 私たちは あてどない星の片隅 四季の彩りを支えとして 許された目覚めの狭間を まどろみ続ける

不連続な断片② second version たなかあきみつ

俯いた男の視線の先に 実体的に古びたマンホールの鉄蓋。 ましてや眼底のその場には 《合流》の二文字が盛り上がる。 道端の工事用堅坑がどんぐり眼をよぎる。 1週間後にはもう姿を消した看板《酸欠な危険場所》から 大画面のザオ・ウーキーの濃紺の奔流がごうごう、 ざら紙のように暮れなずむラゲリ群棲地痕の広大な地図上の レナ河とオビ河さながらとうとうと タイガをモノクロ貫流した。

（さて治道の《空き地》で無風にそよぐ 夏草の緑のシューティングに事前予約は必要か 2021.10は何色の絵の具を捻りだすのかコロナ禍という盛大な口実で 描く絵の具の挫傷は無風でざらついて《脈々と》赤いパルス

こういう事態に思わず尻込みするな今でもすっかりジャジイなマイルスよ、 平坦な道ではなかった、五里霧中のスリットは佳境、白髪一雄の油絵の実物 その原色の過電流に対峙し感電する代わりに、

——たとえ Kazuo Shiraga retrospective なる回顧展の図録上であれ 対峙した原色の渦を巻きのたうちまわる事態により 《剥き出しの肉と神経からなるケルマンス》の過飽和や 過呼吸に陥るのを怖れる自分のイマジネールの衰弱を思え――

あるいは突然の所見でアルトー的な電気ショックをくらったような 橋桁Ⅱ支持体である異形の押捺、 白髪一雄が創始した街づくりのフット・プリンティングに 隣接した銀のトレーにはバンジージャンプもどきの ふてくされた鯛の目玉、パラフィンもどきの頭骨、そして背びれという スクリヤービンのピアノ・ソナタを髣髴とさせる鯛三態。 奇数さんみいで

こうして《物騒な自由》を享受する、無地の空無をつかめ 鳥賊の骨の水色のピンセットで

【補註】ケルマンスⅡケルト神話の狩猟の神、ミシエル・レリスの《ゲームの規則Ⅳ》からの引用。《物騒な自由》＝鷲田清一《素手のふるまい》（朝日文庫）からの引用。

嘆きの壁 生野 毅

どの家にも嘆きの壁というものが ある 雨戸の手前の植木鉢を その受け皿を 雨樋の排出口を その周りの土を 次々と夜が焦がしてゆく と 家が家の間の見えない水路を伝って きまつて嘆く人があふれ出す 聖地で壁を打ち倒そうと 砂を掘りしめた人々はいざ知らず 草が伸び放題の一角の 立ち枯れの薔薇を見おろす 北東向きの壁が 嘆きの壁 茎や葉に粒だつ アリマキやカイガラムシさながら 群がり 集まる 人 嘆く人 音たてぬ 囁かぬ 人 人 嘆く人 人 聖地で人が仰いだ 汗ばんだ白い雲 赤黒い血の雲はいざ知らず 覆した巨大な水盤ながら 空から夜は滴り落ち 囁くことをやめた 立ち枯れの薔薇が 嘆きの壁に滲んでゆく

鬼の首 二条千河

蒼白い光が照らし出す夜道の そこかしこに落ちて いる 首、 血眼になって探すまでもなく ほら、またひとつ軀がつた 中には見覚えのある顔もあろうが 憐れみなど無用だ 胴から切り離された瞬間に 開かれた腫孔は赤く変化し 唇からのぞく牙は鋭く伸び 額には尖った角が生え出でて それらはもはや人ならぬ異形のもの 仏に成りそこねた鬼の首 親指一本で造作もなく

思い返せば君の取ったその首も 草の根に埋もれたままの僕の首も 胴から切り離される前までは 気高い英雄の顔をしていた―― しかし今、蒼白い光の照らし出す夜道に 次から次へと軀が落ちてくるものは いずれも目おぞましい鬼の首、 首、首 ほか、またひとつ

君の胴から切り離されて

林の中で 久野雅幸

まるで 雨戸をしめるように 顔を とじて 唇をしめるように 口をとじて あなたは 閉ざされた家になろうとしていた 美しく彩られた 林の中で 蝶が 林の中に入ってくる 季節に あなたの姿がいつそう明らかに 木の枝の向こうに見えるようになった 孤独な家のように 種まくことをやめてしまったら 掌から 季節が始まることはなくなってしまうのだろうか 掌におさまる果実も 枝になく 林の中に 光しかない！ 季節となった

林の中で わたしたちが知ったのは わたしたちが林の中で生きるものではないということ 獣のように 木の後ろに隠れたり 蝶のように 木と木の間に 誘われたりすることがあっても

道をたどって 林を抜ければ 長く下る 坂の上に出る 夕日に真向かいに立って 夕日に照らされた 家並みの広がる町を見る場所―― ことは林であつたにしても 林の中とは 違う迷い方をする場所だね

9 G式 池田 康

9 Gデジタル波とびかうメトロポリス ゆるきやら局がハッピーライフを宣し 毎週の区長選挙は閑話休題の暇つぶし 欠伸の言葉とあくびの行為とが決裂する 名前を失い個人番号を名乗るうらぶれた番号たち 魂は三百円のカチャガチャで買うんだよ ジェットコースターで地上八十階の教室へ通い ますイカロスの作法を習う 翼をもたぬ園児 ドローンと鴉が白昼夢の制空権を争う はるかかなた山脈が薄紫に輝くがそこへ行く道はない 押入れの奥のトランジスタラジオの昔々 少年と少女のやんごとなきおまご遊び コードレスイヤホンで偽造無意識と電話する 都立図書館は掌にのるメモリスティック もぐりこんで百年前の発禁本の戯言を読む白い老人 余の辞書に不思議という文字はないと吹き 忘却のはて無知文盲のモノクロームにつつまれる 9 Gは天国の扉 エーテルの蛇口 宇宙の眼 遍在するデジタル波はすべての存在を走査し 事件は刹那に史となつてアーカイブされ 裁判は裁判官なしに刹那で結審し 道は永遠の双六 生まれた刹那に骰子はふられ 年齢は数えない 刹那で動く世界に人生は長すぎる この国は幻の中学生ハッカーが生耳ついている という都市伝説を小学生ハッカーが流し 信じて高校生ハッカーは捜査に乗り出す 初代式守伊之助の軍配のこまなく好む 煎餅が勝つか歯が勝つかのこわい煎餅はもうない 長い長いストロー天から伸びてきて頭蓋骨の隙間を吸う ような爽快さをうたうポップソングに酔い痴れる QRコードの刺青をした春を売る男の蒼ざめた春 高層建築のはざま 一と零のはざまを飛ぶ鴉 鴉 空をうめる鴉の影 影 影 目撃証言あまた しかし区新聞も乞食も拾わない芥の無意味 黒い空は百Gの大津波を幻視する 9 Gメトロポリスの憂鬱は バトルロワイヤルゲームとパニライスクリーム 憂鬱を抹消する技術が成就していること 9 Gメトロポリスの教習は 数値的にある男女を特定し偶然を装い 出会わせめでたくハッピーライフ 天使型アンドロイドが生まれる 鉄塔の尖で鴉が奇妙なうぶ声を出している

詩素 10 号記念・投稿詩募集

詩誌「詩素」が10号に達することを記念して、若い世代の詩人を対象に、詩作品の投稿を募集します。要項は下記の通りです。清新な作品の到来を期待します。

- 《応募資格》40歳以下（締切日を基準として）
- 《応募作品規定》一人一作。本文40行まで（空行含めて）。一行の字数は40字まで。
- 《締切》2021年2月28日（日）
- 《賞》最優秀賞＝1篇、優秀賞＝2篇
選ばれた作品は、詩素10号に掲載される。粗品進呈。
- 《選考委員》南原充士（委員長）・海塾今日子・富上芳秀・野田新五・南川優子
- 《発表》詩素10号誌上

《応募先》 siso-obo@kozui.net

上記のメールアドレスにメールにて応募のこと。作品原稿はメールに直接書き込むか、テキストファイルあるいはワードファイルを添付する（一太郎は不可）。氏名・郵便番号、住所、年齢を明記のこと。郵送・ファックスは不可。